

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

F. その他

①大学院生・研究者等の積極的な受入・派遣等

取組を進めるに当たり困難であった事例について

F. その他

①大学院生・研究者等の積極的な受入・派遣等

《人社系》

●東北学院大学文学研究科アジア文化史専攻

「遺跡遺物資料処理技能開発の日中韓協同推進」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

本取組の一環として中韓の第一線の研究者を講師として招聘し、中韓口での教員の引率を伴う院生の「学外実習」も積極的に展開した。また、本専攻はこの間、中国社会科学院と武漢大学から客員教授を毎年招聘した。しかし、取組実施中もその後も本専攻の院生が留学をするとか、内・外部の中期的な調査に参加するという効果がなかなか生まれない。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

- ①確かに中韓口での「国外学外実習」はいずれも1週間程度の短期間で、外国語ができる教員の引率や通訳の同行があった。
- ②留学も含めて中期的な調査を海外で行おう、英語を駆使する自助努力をしようという意識を促す教員の努力は、必ずしも十分ではなかったし、海外調査に対する意識の低い教員がいることも事実である。
- ③景気の低迷による保護者の経済的な問題もあろう。
- ④本取組自体に大きな影響はなかったが、取組終了後の院生の「国外に対する意識」の持続性と発展を見据えた対応は、教員・院生ともに十分ではなかった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

本取組においては、予め「国外学外実習」の期間を内規で1週間程度と決めていた。しかし、院生の「アジアの歴史と文化」に対する意識を高め、留学を志すような者を出して行くためには、院生の安全性と教育上の配慮に基づく教員の引率を一部取りやめるとか、「国内学外実習」を厳選して、「国外学外実習」のなかに期間を1ヶ月程度とする実習も厳選して実現する等の試みも必要であったのかもしれない。

《医療系》

●東京大学新領域創成科学研究科メディカルゲノム専攻

「メディカルゲノムサイエンス・プログラム」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

国内外の先端的研究者を講師に招いてセミナーを開催したが、国外、国内から招聘する

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

F. その他

①大学院生・研究者等の積極的な受入・派遣等

旅費の手当が難しかった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

理由は、講演者を単独に招待するには経費的な負担が重く、当教育プログラムにふさわしい研究者が学会参加等で上京あるいは来日した際にその都度機会を見て依頼せざるを得なかった。従って、計画的な配置が出来ず、当初計画より少数の開催となった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

実際に開催したセミナーは、平成19年度は、外国人講師2回、国内講師4回；平成20年度は、外国人講師1名、国内講師1名（ただし、この年度にはシンポジウムを開催し、国内講師3名を招聘）；平成21年度は、外国人講師3名により、それぞれ独立したセミナーとして都度開催した。

学生への教育の機会として貴重であるため、計画的に研究者の情報を収集し、継続的な開催の工夫をする必要がある。